

## とりかへばや物語

### 父大納言の悩み

いつの頃にか、権大納言にて大将かけ給へる人、御容貌、身の才、心もちるよりはじめて、人柄、世のおぼえもなべてならずものし給へば、何事かは飽かぬことあるべき御身ならぬに、人知れぬ御心のうちのもの思はしきぞ、いと尽きせざりける。

北の方二所ものし給ふ。一人は源の宰相と聞こえしが御むすめにものし給ふ。御心ざしはいとしもすぐれねど、人より先に見初め給ひてしかば、おろかならず思ひ聞こえ給ふに、いとど世になく玉光る男君さへ生まれ給ひにしかば、またなく去りがたきものに思ひ聞こえ給へり。いま一所は藤中納言と聞こえしが御むすめにもものし給ふが御腹にも、姫君のいとうつくしげなる生まれ給ひしかば、さまざまめづらしく、思ふさまに思しかしづくこと限りなし。

上たちの御有様のいづれもすぐれ給はぬを、思すさまならず口惜しきことに思したりしかど、今は君たちのさまごまうつくしうて生ひ出で給ふに、いづれの御方をも捨てがたきものに思ひ聞こえ給ひて、今はさる方におはしつきにたるべし。君たちの御容貌のいづれもすぐれ給へるさま、ただ同じものとのみ見えて、取りも違へつべうものし給ふを、同じ所ならましかば不用ならましを、ところどころにて生ひ出で給ふぞ、いとよかりける。

おほかたはただ同じものと見ゆる御容貌の、若君はあてにかをり気高く、なまめかしき方添ひて見え給ひ、姫君は華々とほりかに、見ても飽く世なく、あたりにもこぼれ散る愛敬などぞ、今より似るものなくものし給ひける。

いづれもやうやう大人び給ふままに、若君はあさましようもの恥ぢをのみし給ひて、女房などにだに、少し御前遠きには見え給ふこともなく、父殿をもうとく恥づかしくのみ思して、やうやう御文習はし、さるべきことどもなど教へ聞こえ給へど、思しもかけず、ただいと恥づかしのみ思して、御帳のうちにのみ埋もれ入りつつ、絵かき、雛遊び、貝覆ひなどし給ふを、殿はいとあさましきことに思しのためはせて、常にさいなみ給へば、果て果ては涙をさへこぼして、あさましようつつましのみ思しつつ、ただ母上、御乳母、さらぬはむげに小さき童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの、御前へも参れば、御几帳にまつはれて、恥づか

し、いみじとのみ思したるを、いとめづらかなることに思し嘆くに、また姫君は、今よりいとさがなくて、をさをさ内にもものし給はず、外にのみつとおはして、若き男ども、童べなどと、鞠、小弓などをのみもて遊び給ふ。御出居にも、人々参りて文作り、笛吹き、歌うたひなどするにも、走り出で給ひて、もろともに、人も教へ聞こえぬ琴、笛の音もいみじう吹きたて弾き鳴らし給ふ。ものうち誦じ歌うたひなどし給ふを、参り給ふ殿上人、上達部などは愛でうつくしみ聞こえつつ、かたへは教へ奉りて、この御腹のをば姫君と聞こえしはひが事なりけりなどぞ、みな思ひ合へる。殿の見合ひ給へる折こそ取りとどめても隠し給へ、人々の参るには、殿の御装束などし給ふほど、まづ走り出で給ひて、かく馴れ遊び給へば、なかなかえ制し聞こえ給はねば、ただ若君とのみ思ひて、もて興じうつくしみ聞こえ合へるを、さ思はせてのみものし給ふ。御心のうちにぞ、いとあさましく、かへすがへす、とりかへばやと思されける。

注

- ① 権大納言にて大将かけたまへる人 権大納言であつて大将を兼任している人。
- ② 源の宰相 源氏で宰相である者。
- ③ 藤中納言 藤原氏で中納言である者。
- ④ さる方におはしつきにたるべし それなりの夫婦仲として落ち着いて暮らしていらっしゃるようである。
- ⑤ 同じ所ならましかば不用ならましを 一緒にお育ちになつていたら具合が悪かつたであろうに。
- ⑥ 御前遠き おそば近くに仕えない女房。
- ⑦ 出居 寝殿造りの、廂の間に設けられた接客用の部屋。